

ウィズソル

ウィズソル（広島市西区、外輪純久社長）は、大型タンク、産業インフラなどを対象とした検査・診断事業を展開する。非破壊検査を中心に手がける。自社開発の無線式の超音波連続板厚測定ロボットを投入して、検査員の負担軽減や検査コスト低減を図っている。また、高所配管などの肉厚を測定するための超音波センサー搭載飛行ロボット（ドローン）の開発も進めており、11月をめどに実証実験を行う計画だ。

（広島・水田武詞）

以前は超音波を使う入したのは、顧客の要検査装置では、手動式望があったからだ。石や有線の自走式装置を油精製や石化プラント活用してきた。現在、ト、発電所などの大型新たに現場投入している配管、石油タンクではるのが、無線式の超音波検査用に足場を組む。波連続板厚測定ロボット「UDP-32」だ。この足場を組む付帯工事が検査費用の約7割を占めてしまう。バッテリー搭載で約4時間稼働できる。配管などの板厚を調べ減肉部などを確認できる。これに対し、バッテリーを搭載し無線操作する自走式ロボットを使う。32個の超音波センサーを備え、1回の走行で約340ミリの範囲を測定し、板厚2ミリ〜60ミリに対応する。検査速度は同社装置比約1.5倍に高めた。重さは約14キロ。マグネットローラーで対象物に吸着し測定する。超音波の測定データも無線でパソコンに送信する。

検査にロボットを導



板厚測定 無線式を活用

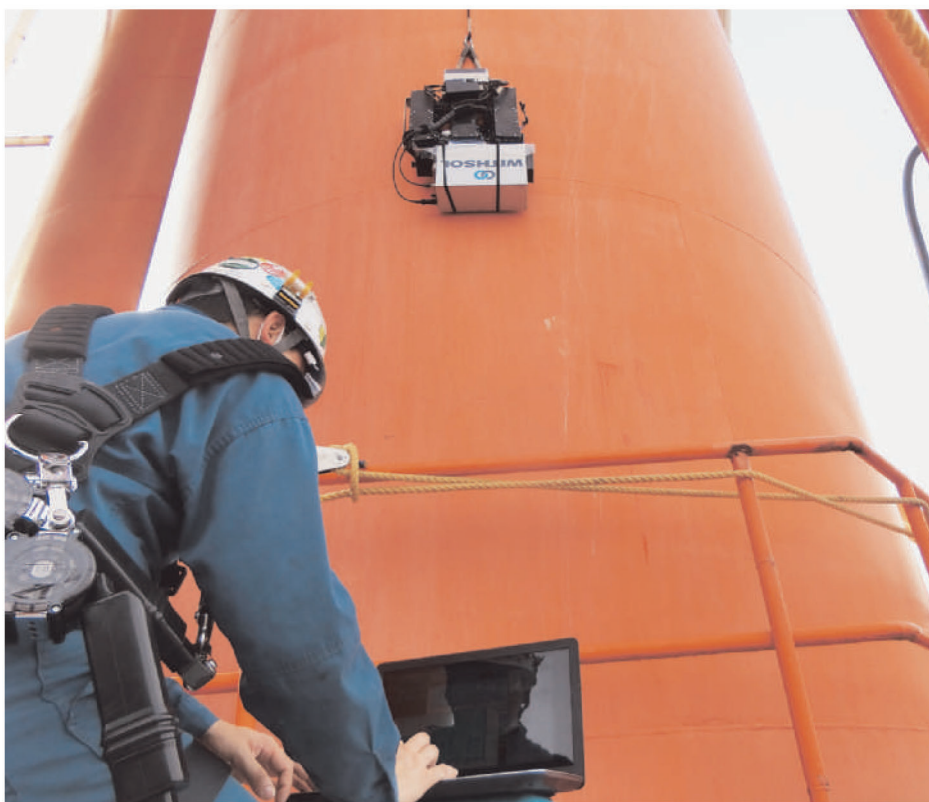
足場削減 コスト抑える

所を絞ることができ、どある電源用と超音波検査そのものを使う費用を増やせる。加えて無線式としたことで、有線式で必要だった長さ20ミ、重さ15キロは、ロボットによる測定

良取得でき、顧客から好評という。ただ無線操作ロボットという従来とは異なる装置であるため普及には少

だ。検査員は、離れた場所にあるロボット操作に慣れる必要が。小柴貴之取締役は「ロボットをどう動かせばよいか、検査で使って移動させ、より多くてみて気付くこともある」と明かす。運用度の高める。小柴取締役は「ドローンはA3サイズ程度の見込み」という。経済産業省の「産業保安高度化推進事業費補助金」に採択されており、11月をめどに福島ロボットテストフィールド（福島県南相馬市）の施設を使

の後の詳細な検査や補修につなげる。また線状測定が可能



①UDP-32を使えば、ケーブルが不要となる
②バッテリー搭載で4時間稼働できる（UDP-32）



ある場所を把握し、そだ。